

## 2016 年度漢文夏期集中コース報告

大 竹 弘 子

### 1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、本年度、40 週間の年間コースとは独立して3 週間の漢文夏期集中コース（以下漢文コース）を設置し、2016 年6 月24 日（金）より7 月14 日（木）まで実施した。

漢文は年間コースでも、プログラム後期において「選択 C」として週1 回100 分の授業を実施している。しかし、年間プログラムに参加は出来ないが、研究上、漢文読解を必要としている大学院生、研究者等が想定されることから、日本人が書いた漢文を中心に、漢文の基本構造・読解に集中したコースを設けている。

### 2 漢文コースの目的と特徴

このコースは、対象として、主に一次資料として漢文を読むことが必要な歴史学、文学、人類学、宗教研究、美術史等の分野の大学院生、研究者を想定している。漢文読解の必要はあっても、漢文基礎の学習機会が少ないことから、基礎となる構文、旧漢字、漢文訓読体、候文などを集中的に学習し、その構造知識をもとに実際の文章を読み、和製漢文の文体・特徴に慣れ、以後の研究に資することを目的としている。

受講者には次の要件を満たすよう求めている。

1. 漢文読解能力を必要とする専門的または学術的分野への従事を目指していること
2. 上級レベルの日本語能力、および文語文法の知識を有すること
3. 日本語の基礎的文法・文型を十分に理解し、ひらがな、カタカナに加え、漢字約1000 字以上の読み書きを既に習得していること

### 3 受講生の構成

今年度は博士課程に在籍する五名の大学院生、修士課程に在籍する一名の大学院生の計六名が受講した。専門分野は平安文学、中世文学、近代文学、及び仏教で、研究において、漢文あるいは漢文調で書かれた一次資料の読解・理解を必要としている。研究対象、及び、読むべき一次資料はある程度固まっており、漢文の知識に関してはある程度既習の受講生、全く知識のない受講生が混在していた。

## 4 教育活動の詳細

### 4-1 授業の枠組み

第一日目、オリエンテーションでは、受講生の専門分野、漢文に関する知識を把握するとともに、このコースで扱う「漢文」とはどのようなものか、漢文訓読の際にはどのような提示法が用いられているかを説明した。

以降、毎日の時間割は、50分授業が4コマの構成で、うち2コマを午前10時00分から午前11時50分までの間に行い、昼休みを挟んで2コマを午後1時30分から3時20分に行なった。

午前の2コマは第一・第二週の間、漢文の構文構造を中心に、単純なものから複雑なものへの積み上げとともに多数の例文を自力で読み解いていく練習を重ねた。今年度は受講生の漢字知識、日本語知識がある程度高いレベルにあったことと、学習意欲が強かったことから、練習文は、白文の形で提示したものを中心に、返り点のみ付したものを織り交ぜて用いた。

午後はまとまった文章の読解が中心で、第一週目は近代の文章を取り上げ、漢文訓読体、旧漢字に慣れることを目指した。二週目は『日本外史』『論語』などからまとまった内容のある短い文章を選び、返り点、送りがなを付けた形で、文脈のある文章の読解を行った。

第三週午前は今年度の受講生の研究対象に合わせる形で、漢詩を取り上げ、中国漢詩・日本漢詩の読解を行い、さらに『和漢朗詠集』「夏螢」の部を読み、北村季吟による漢文訓読体『和漢朗詠集註』該当部分の註釈読解に取り組んだ。最終日には、完全な白文の文章を自力で読み解いていくことに挑戦した。午後は受講生の選んだ研究資料を取り上げ、一部分を選び、全員で読解を試みた。取り上げたのは、『小右記』より「行成と斉信」、『日本霊異記』より「十一面観音の現報」、『明月記』より「治承四年五月三〇日～六月一三日」、『真字本方丈記』第一段落の四点である。

### 4-2 授業の実例

ここでは、より具体的なクラス活動について述べる。

午前の構造中心のクラスでは、まずその日の学習項目である構文を、典型的な例文を用いながら説明する。次に用意した短い例文（大体15から25文）を練習文として提示する。受講生は各自自分で例文を読み解いてみる。例文にはその日の学習項目だけでなく、既習の構文、漢字のやや例外的な読み・用法（標準的な漢字辞典には含まれているもの）、語彙・表現的な要素、慣用的な語法などを含めている。受講生は練習文を既習の構文構造をもとに解析し、辞書を引きながら意味を取っていく。分からない漢字、語彙、表現についてはもちろん辞書を引くのだが、自分が既に知っている漢字でも、現代語の読み・語彙・意味ではなく、いわゆる漢文訓読体で用いられる、読み・語彙・意味を適切に選ぶよう指

導する。また、この過程で、辞書にどのような情報があるか、どんな種類の辞書、データベースがあるかなど、実際に資料を読み解く上で必要になるであろう「調べる手段」についても知識を得る。例年、見られる傾向だが、受講生は電子辞書その他の電子的デバイスの漢字辞書、国語辞書等を用いて調べる。しかし、どの辞書のどこの部分にどのような情報があるかという知識が足りず、辞書の機能を十分に活用することができていない。クラスで辞書を引かせることは、「辞書をどう使うか」「辞書のどこに求めている情報があるか」「ある特定の情報が欲しい時にはどの辞書が適当か」という技術的な訓練も兼ねている。

さらに、短い文ではあるが、文脈からの意味判断、話題の背景からの推測などを通じて、文の要素の意味関係を推測していくという練習にもなっている。今年度は白文の形で文を提示し、どの漢字が解読の鍵となるか、どの漢字の組み合わせが語彙として成立しているかを全員で探りながら練習を進めることが出来た。

午後はよりまとまった量の文章を取り上げて読み、意味を取るという作業を行う。著者、題名、歴史的背景などの情報を得てから実際に読み進めるが、まず、構文知識などを応用しながら、文章をまとめた意味の固まりに分節化していき、どの漢字が語彙としてのまとまりを構成しているかを判断する。次に辞書を引き、その中から適切な情報を選択する。そしてその情報を意味が取れるよう繋げていき、文脈にあった意味関係を作り解釈する。この過程の中の全ての段階で、受講生同士の意見交換、また教師と受講生間の意見交換が行われ、何を手がかりにし、どのように調べていけば妥当な解釈にたどり着けるかを模索する。このような作業を繰り返すことによって、実際の資料を読み進める時に必要な技能の習得を目指している。

## 5 おわりに

今年度は六名の受講生が、意欲が高く、漢字、日本語の知識ともにある程度高いレベルにあり、漢文構造を扱う際にほぼ「白文」の形で提示することが可能であった。そのため構造上の手がかりを探っていくという練習が十分に行え、それぞれの資料解読においてもその知識が有効に機能していたと思われる。また、オリエンテーションでのコース説明、「漢文」の形式の提示などをより充実させたことも、意欲を引き出す助けになった。

コース終了後実施したアンケートでは、コース期間が三週間という短期間であることに對する言及が見られた。これはより長期のコースを希望しているというのではなく、基本知識の習得後、各自が講師の手助けを得ながら、資料を読む時間が欲しいというもので、獲得した知識を自分の資料に当てはめる訓練期間があるとよいということだった。また、全員が短期間にもかかわらず、「多くを学んだ」という実感を持てたのは幸いである。

(おおたけ ひろこ／2016年度漢文夏期集中コース主任)